

第十七章 裏切りの湖畔

1

《コラ！ いつまで寝とる！》

「も、申し訳ありません!!」

雛田は直立不動の姿勢をとるべく両膝を伸ばした。そして、イヤというほど頭を天井にぶつけた。

「あつつつつ…」

雛田は頭頂部をかかえてシートにかがみ込んだ。ようやく彼は、昨夜からずっと車の中にいたことを思い出した。身の置き所のないまま、運転席で眠ってしまったのである。それが証拠に、額にハンドルの後が付いている。

《こんなところで時間を潰しているのか?》

ピンクのカバは小馬鹿にした口調で言った。さっきの怒鳴り声はこいつだったのだ。カバ松を投影する携帯電話はダッシュボードの充電器に差されてあった。

「もういい加減、カゲみたいな物言いは止めてくれないか。カバの顔して言われると、腹が立ってくる」

《気に入るな。そんなことより》とカバ松は雛田の言葉を適当にあしらって続ける。《例の親子はどうした?》

「ああ、あの人たちは家の中で寝てる。まだ目覚めてないんだろう」

雛田は顎で車庫の壁を示した。そこにはアルミ製のドアがあり、そのまま家の中へとつながっている。

いまそのドアが勢いよく開き、車庫の中に女性が飛び込んできた。駿河千恵子、あの全身麻痺の少年、駿河炎の母親である。彼女は四駆の窓に両手をあててワンワンと泣き始めた。

《進歩はないみたいだな》

雛田も同感とばかり、フウとため息をついた。母親は昨夜からあの調子なのだ。

「息子の言葉を通訳していたPAIがリセットされたらしい。それでいきなり口汚い罵倒を浴びたんだ。泣きたくもなるよ」

《母親に同情するの？　いま息子がしゃべってる言葉こそ息子の本音なんだろ？　「ふざけんな」とか「俺に触んな」とか。

母親のほうこそヒドいじゃないか。わがままな息子のナマの声など聞きたくないってんで、ソフトな口調に修正するところまではいいとしても、自分の好みに合わせて『良い子』を演じるよう改良を重ねた結果、会話の九割以上が捏造だったっていうじゃないか。人権侵害もいいとこだぜ》

「だが、医者が見放すような病気だ。そんな息子を命がけで看病する親の立場にもなってみろ。注いだ愛情がムチになって返ってきちゃあ、たまったもんじゃないぞ」

《とか何とか言って、お前、清香と自分を重ね合わせてるだけじゃないのか？》

雛田はウツと声を詰まらせた。あんまり腹が立ったので、ダッシュボードをひと蹴りし、ドアを開けて車の外に出ようとした。

《待てよ、短気だな》

「お前こそいずれリセット掛けて、元のうすらカバに戻してやる」

《うすらカバだと、お前の相方は務まらんぞ》

雛田はぐうの音も出なかった。萌黄にヒントをもらって、カバ松とコンビ復活だ！ と驚喜したのはまだ一昨日のことなのだ。

《そんなことより、お前にメールが来てる》

「メール？ 清香からか！」

《まあそうなんだが、ちよっとおかしい。いつ着信したのか、気がついたらメールボックスに入ってた》

「どうせ寝てたんだろうが」

《お前といっしょにするな。しかも差出人の名前もない、単なるテキストファイルだ》

「分析はいいから、内容を教えろ」

カバ松は短い文章を画面に表示した。

『おじさまへ わたしは大津にいます。清香』

「……これだけか」

《ただだ》

「大津といえば、例の迷彩服たちが真佐吉とかいう悪党に罠にかけられた場所だな。ひよつとしてこのメールも罠だったりして」

《お前みたいな一庶民をハメてどうする？》

「まったくくだ！ すると本物か。……しかし、あの親子を連れて来させるためかもしれんぞ」

《それなら最初から親子の携帯にメールするんじゃないか》

「もつともだ！ よし、カバ公、俺たちの行き先が決定したぜ。大津までの経路を探索しといてくれ」

《アイヨ、相棒》

雛田は車を出た。

「奥さん」彼は泣き続ける母親に声をかけた。「あのお、息子さんの様子はどうですか？」

「——あ、あ、あんなの息子じゃありませんー。あの子には何か悪魔が取り憑いたんです！ いいえ、いいえ、きつとP A Iが暴走してるんですわ、ウイルスに汚染さ

れて……きつとそうに違いありませんわー！」

そしてまた号泣を始める。

母親は自分が仕組んだP A Iファイルタ越しの息子の声が、正真正銘の息子の声だと、いつしか信じ込んでいたらしい。今ここで、それは逆なんですよと下手な説得を試みても彼女は聞く耳を持つまい。

## 2

「まあまあ、そう嘆く必要はありませんよ。きつと直してもらえますから」

「もうわたし、誰も信用できませんわー。大学のお偉い先生だからと安心して伺ったら、どうでしょう、わたしから息子を取り上げて隔離するし、あげくの果てに、元の世界に送り返すとか、それが息子の幸せになるとか、勝手なことをおっしゃって……その結果があれじゃない。実験に失敗しちゃったでしょー」

実験が失敗？ 彼女は転送装置の現場にいたはずだ。

伊里江真佐吉（じつは影武者）の破壊工作をその目で見ていたはずだ。

実際にあつた出来事を都合良く解釈している。息子、いや母親自身にとってメリットかデメリットかでしか考えない。どうやら捏造は彼女にとって日常茶飯事らしい。

雛田は慰める気が急速に失せた。

しかし母親は、ここぞとばかり雛田にすがろうとする。

「ねえ、あなた、雛田さん」

「はい、はい」

「萌黄さん、とかいいましたっけ、そのお嬢さん。息子のP A Iを直せるとかいうのはー」

「ええ」

「信用していいものでしょうかねー」

「彼女はコンピュータに関しては恐ろしく才能があるそうですね。自分でもP A Iを改良していたといえますからね」

「でも、ただの学生さんでしょう？ お偉い教授先生でもサジを投げたんですから、無理じゃないですかー？」

サジを投げたのはない。野宮助教授には、そんなことにかかづらわる気は毛頭なかったのだ。

「——大丈夫ですよ。彼女は息子さんの異変に真っ先に気づいたぐらいですから」

「そうねえ。……でもどうして気づいてくださったのかしら、あんな女の子が」

雛田にもそれは判らない。

とにかく母親を車のシートに腰かけさせると、彼は家の中に入っていった。目的地も決まったことだし、そろそろ移動しないとマズい。自分たちのいる場所は京都工

大からそれほど離れていないのだ。いつ迷彩服たちの捜索の手が伸びてくるかと思うと気が気ではない。

(その割には、昨夜はぐっすり眠ってしまった)

昨夕、無人のこの家に潜り込んだとき、身も心もくたくただった。

キャンパス内で地震に遭遇し、その後の作業員たちの反乱、台風のように通り過ぎた強い風、バスに乗った暴徒たちの侵入。

気がつくとき清香の姿はなかった。

雛田は動揺した。今や彼の生き甲斐は清香だけだ。彼女に対して、父親としての名乗りを上げることこそ、唯一の生きる望みだった。なのに……。

おそらくバスに乗った連中に連れ去られたのだ。そう信じた雛田は、崩れた校舎を迂回し、でこぼこの地面を乗り越えて大学の外に出た。彼と清香が京都まで乗ってきた車が、裏通りに停めてある。

「もし、その人！」

壊れた通用門を出ようとした時、呼びかけてきたのが炎少年の母親だった。彼女はベッドに乗せた息子を引張ってここまで逃げてきたらしい。

成り行きである。雛田は親子を連れて大学を後にした。そして首尾よく車にたどりつくくと、ふたりを乗せて猛然

とアクセルを踏んだ。とにかく大学を離れようと。

「炎君。出かけるぞ」

応接室にいた炎少年が、車椅子ごと彼のほうを向いた。『遅いんだよ。とつくに太陽は上がってる！』

「減らず口は相変わらずだな。お母さん、泣いてたぞ。あんまり親不孝するな」

『家庭内のことに立ち入るなよな。よそ者が』

「マイッタなあ。これが年端もいかない子供の言葉か」

『ふん。身障者はみんな純粹で前向きで、涙を誘う物語の主人公だとも思ってるのか？ 笑わせんなよ』

「お前ん家は金持ちらしいじゃないか」

『金持ちの家の子供は何不自由なく育つから、わがままな性格になるんだと言うつもりか？ オッサンもつまらん連中と考えることはいっしょだな。貧乏根性のひがみだよ。そんなつまらん連中がまわりにいたから、こんなクソガキができたんですー』

雛田はやれやれと手近な椅子を引いて腰をおろした。

彼は思う。確かに炎少年はクソガキだ。クソガキだが、話に筋が通っていてボキャブラリも豊富だ。知性の高さをうかがわせる。おそらく閉じ込められた世界にいて、良くも悪くもネットだけを相手に、知識や経験を深めていたのだろう。

炎の毒舌トークはそれほど不快ではない。若者のわがままなど、芸能マネージャーをしていれば頻繁に遭遇する、まさに日常茶飯事の出来事だ。

「オッサン、ナニ笑ってんだよ」

「え？ いやいや、大したこっちゃない」

雛田は笑みを押し隠すと、少年のそばに寄った。少年は警戒して車椅子を後退させる。

「こら、許可なく近づくんじゃねえよ！」

車椅子の動きは遅い。雛田は素早く後ろに回ると、小さな黒いレバーを押し下げた。たちまち車椅子は制止し、炎の声は聞こえなくなった。

「それじゃ坊主、おとなしく車に乗ってもらおうか」

### 3

さかのぼ  
遡ること、十五時間前。

萌黄やむんたちを乗せたバスは、京都の街並を左へ右へと駆け抜け、気がつくくと建物は姿を消し、鬱蒼とした森の中の険しい道を突進していた。

運転手は巧みにハンドルを捌いている。

「あの」ゆらゆら「どこまで」ぐらぐら「行くんでしょーか？」

元はバスの運転手という永倉は萌黄の質問に、

「もうすぐでさー」

と威勢よく答えた。しかし萌黄は同じ返事を十回以上聞かされていた。その間もバスは速度を落とさず、乗客たちは乗り物酔いに悩まされていた。

「平気そうやね」

むんが青ざめた顔で訊いた。萌黄はうんとだけ応えておいた。リアルパワーの恩恵であることは間違いない。

「あと数分で到着します。お荷物をお忘れなく」

車掌・信太が乗客に注意を与えた。

バスはようやく速度をゆるめ、木々の間の空き地に停車した。エンジンが静かになる。

「こんなところで降りるん？」

萌黄は、直接、大津まで行ってくれるものだと思い込んでいた。信太が閣下と呼ぶ五十嵐老人にとっても、大津行きは重要なミッションであると、ここまでの道すがら、強引に説き続けていた。しかし、リアルやヴァーチャルなどの概念は、信太の理解を超えているらしく、話は常にそこで止まってしまおう。

「まーこの信太めにおまかせーください」

「でも」

まーまーを繰り返しながら、信太は底の硬い靴で騒々しくステップを降りていった。

萌黄はむんと顔を見合わせた。むんの後ろには久保田

が目を閉じて横になっている。指の怪我のせいで熱を出したのだ。奇妙なのは傍らで彼を看病している和久井助手だ。彼女は必死の顔付きで久保田の額の濡れタオルを交換している。

「あの人、なんでついてきたんやろ」と萌黄。

「さーねえ」とむん。

最後部のシートに寝かされている伊里江は、熱冷まし用のシートを乗せられたままである。また、別のシートには五十嵐が寝かされている。彼は意識を取り戻したものの、未だ夢うつつをさまよっている。

「これ以上、揺れるバスに乗せとくのも気の毒やね」

萌黄は頷くと、窓の外に目を移した。

外は陰々として暗い。高く聳える木々が天蓋のような木の葉で陽射しを遮っているためだ。

太い木の幹の向こうから、突然、数人の人間が湧き出すように現れた。信太が手を振る。どうやら味方らしい。萌黄は携帯の時計を見た。午後三時。

信太が駆け戻ってきた。

「どーぞ降車してくださいー。仲間たちがご案内しますのでー」

「あれもお仲間やったん？」

「そーですそーですー。あらかじめ彼らをここに残らせて、食糧の補給などをやらせてましたー。ちなみにこの

森はワタクシの祖父の私有地です。めったに他人は入ってきませんから、ご安心をー」

信太は鼻にかかる独特の抑揚で説明すると、まだ意識の戻りきらない五十嵐を、運転手の永倉と背負って、先にバスを降りていった。

萌黄、むん、清香は、少しは歩けるようになった伊里江を支えながら後に続く。久保田もふらつく足取りで和久井とともにステップを降りた。

全員が降りるとバスはそのまま走り去っていった。やわらかな下生えの間に、踏みしめた一本道がある。

その先を歩いていくと、やがて一軒の家の前に出た。

「祖父が昔使っていたコテージですー」

信太は「ッ」を特に強調して建物を紹介した。

「ぼろっ——」

むんは言った口を慌てて閉じた。

外壁のペンキは剥がれ落ち、絡み合った蔦がその上をびっしりと覆っている。見るからに使われなくなつて久しい二階建てのコテージである。

先着の仲間たちによって掃き清められた玄関を入ると色褪せた絨毯の敷かれたロビーがあった。投げ出したようにソファが並べてある。一同はひとまずそこに落ち着いた。

五十嵐は隣接する寝室に寝かされたが、伊里江と久保

田は大丈夫と言って横になるのを断った。

「ここまで参謀として付いてきたんだ。ラストまで見届けさせてもらおうよ」

久保田は力なく笑う。

「さーさー皆さんハングリーでしょー。昼抜きでしたから、少し多めの食事をご用意しましたー」

一同が食堂の扉をくぐると、テーブルにはパンや料理が山のように盛られていた。それを目の当たりにして驚かない者はいなかった。

「食糧難のご時世だというのにスゴいな」

久保田がクロワッサンを手でひっくり返しながら言う  
と、

「祖父の家から分けてもらいましたー」

信太は胸を張って応えた。

食事は萌黄たちと信太たちグループの幹部クラスとの会食の形でスタートした。例によって肉や魚介類はない。食材は野菜ばかりである。

「ここは京都と滋賀の県境の辺りですよね」

むんは野菜サラダをボールからよそいながら訊ねた。

「ほーれふほーれふ」

信太は猛烈な勢いで食物を口の中に掻き込んでいる。

「このコテージに寄ったのは、ご飯を食べるためだったんですか？」と萌黄。

「それもーありますがー、最大の理由はー、追っ手をまくためですー。だってあなたー、ずっと心配してらしたでしょー？」

「ううん」萌黄は首を横に振った。「そういう心配はしてませんでした。彼らにわたしらを捕まえるつもりはないと思うし」

「ほー」信太は食べる手を停めた。「それはーどういうことまで？」

萌黄はナプキンで口を拭うと、

「彼らの狙いは、わたしたちを泳がせておいて、大津に潜伏している真佐吉さんと接触したところを一網打尽にすることやと思うんです」

食堂に沈黙が降りた。

ややあつて久保田がスプーンでスープをすくいながらつぶやいた。

「俺たちは餌ってわけか」

萌黄は皿の上の豆腐ハンバーグを見つめながら頷く。

「そうですね。執念深い真崎のことだから、転送装置が壊れて、真佐吉さんを捕まえ損ねた——じっさいは影武者だったんだけど——あの瞬間からわたしたちを餌にするつもりだったんでしょう。」

いえ——リアル憎しで凝り固まったあの男が、目の前に集まったリアルに牙を剥かなかつたのは、最初からわ

たしたちを餌としか考えてなかったんでしょね」

「俺は二度、あの男を間近で見たわけだが、真佐吉の名前を口にするヤツの形相は鬼のようだったよ。いったい何がヤツをあそこまで駆り立てているんだろうな」

再び沈黙が降りる。

「しかしー、私も伊達に軍事オタクを長年やってたわけではありませぬー」

信太はレタスを頬張りながら、狐のような目をさらに細める。

(軍事オタクだったのか)

萌黄は古い軍服を身につけた信太を改めて見つめた。

彼は続ける。

「——こちらの動きを敵に補足されたくない、そう思った私はー、街角に設置されている監視カメラや街角ネットテレビのカメラ、さらには衛星からの撮影に映らないよー、ここに来るまでの道を注意深く選びましたー。あえて遠回りしても、バスを死角の多い道を走らせ、無事に昼なお暗い安全な森の中にゴールしたというわけです。へっへっへー」信太は裂けたような大きな口で笑ってみせた。「それでも結構、考えてるんでさー」

「なるほどね。ここなら衛星からも見えない、か」  
久保田が見直したように感心する。

「祖父は仕事柄、人目を好みませんでしたのでー」

「待って」むんが手を挙げて注意を惹いた。「ゴールはここやないんですけど」

「判ってまさー。バスに乗るのはここまでってことでさーね」

「じゃあ、ここからは歩き？」

「いえいえー。食事が終わったらご案内しますー。バスの次は“快適な空の旅”ってやつでさー」

(空？ 見つかるやん、そんなの)

萌黄は不安になった。

#### 4

「判った！ 気球に乗るんやね」

清香が弾んだ声を上げた。なるほどそれなら確かに空の旅だ。しかし、うれしがるほどのことかな、と萌黄は心の中で首をひねった。清香にはどこかお嬢様っぽいところがある。

「ワタクシたちが忍び込んだ時の話ですな。しかし違う。気球では目立ち過ぎます。もっと安全に大津入りできる方法があるのです。皆さんにはこれから実際に乗っていたいただきますので、それまでのお楽しみですー」

信太は言うだけ言うと、再び食事に没頭した。

萌黄も空腹を満たすことに専念した。今度いつこんな

まともな食事の機会があるのか、知れたものではない。食べられる時に食べておかねば。

食後にはコーヒーが出た。我慢できなくなったようにむんが質問を切り出した。

「信太さん。あなたがたはどういう団体なの？」

萌黄も気になるところだ。テレビやネットニュースでは繰り返し彼らの映像を観たが、五十嵐を師事する宗教団体のようなものという印象しかない。

「名前などありません。ただ、ワタクシたちは全員閣下に心酔しています。それほどに五十嵐閣下は魅力的なかたでして、この混乱の世に必要なのは閣下のようなかただと硬く信じているわけです」

とりあえず、むんも萌黄もフンフンと相づちを打つ。

信太は言葉を切ると、ロビーで立ち働いていた部下に声をかけ、アレを持って来いと言った。

部下が持ってきたのは、ミラーボールのような小ぶりのくす玉だった。キラキラと光るのは金ラメだ。

部下はそれを高々と上げた。信太はコホンと咳払いをすると、下部に付けられた紐を一気に引いた。

デロンと垂幕が飛び出し、そこに書かれていたのは、

『いがらしかんじゆうろう五十嵐寛壽郎を大統領に!!』

「……………大統領……………ですか」

「そーなんです。閣下のような逸材を野に埋もれさせておくのは何と言ってももったいない。ならば、この混迷深める我が国の頂点に立っていただいて、ぜひとも悩める国民を良きかたへ導いていただきたい。ワタクシはそう思ったわけでしてー」

部下たちは垂幕をくるくると巻き上げ、床に散った紙吹雪を片付け始めた。彼らは説明のたびに、こうしてくす玉を割っているのだろうか。

「でも、五十嵐さんは……人を斬ったんですよね」

おずおずとむんが訊く。萌黄は緊張した。信太が怒り出すのではと思ったからだ。

しかし、信太は眉を曇らすどころか、待ってましたとばかりに身体をテーブルに乗り出して、

「閣下はこう申されたのです。——信太よ、私が斬った者は皆、ヒトではなかったのだ。その証拠に、見よ、彼らは砂のように溶け落ちただろう。」

信太よ、この国は日本人に化けた侵略者に乗っ取られようとしている。だがそうはさせない。この私が彼らの正体を白日の下に晒してやる。見ておれ——と」

萌黄は言葉を失った。

（それは、五十嵐さんが正常ではない時の発言では？）

信太は気づいていないのだろうか？　しかしあえて今

それを指摘するのはやぶ蛇のような気がする。問題は彼らの行動指針の是非ではなく、彼らが萌黄たちにとって敵か味方か、なのだ。

京都工大では、味方と信じていた作業員たちに刃を向けられた。あんな目には二度と遭いたくない。

「信太さん！」部下が部屋の外から鋭い声で呼んだ。

「閣下が起きられました。現状を報告せよと申されています」

「了解！」信太はすかさず立ち上がる。「皆さんはお食事をお続けください」そう言うのと敬礼し、押っ取り刀で部屋を出て行く。五十嵐を心酔しているという言葉に偽りは無いようだ。

萌黄たちがロビーに戻ると、五十嵐はソファに腰かけていた。

「お嬢さんとは前に一度、鉄格子の部屋でお話ししましたな」

五十嵐は、どこにでもいる好々爺然とした顔で話しかけてきた。彼はサーベルを振り回したことも、地震を起こしたことも記憶していないのだ。

萌黄は少し悲しくなった。

「大津に向かうというのだね」

五十嵐の声はどこまでもやわらかく優しげだった。

「はい。——この世界を混乱させた張本人が、そこにいます」

「ふむ。ならば行って、成敗せねばなるまいな」  
萌黄はどきりとした。

本当に今が正気の状態なのか、それとも違うのか。外見ではよく判らない。地震を起こしたときの五十嵐の瞳は透き通るような不思議な色をしていたが。

「閣下」信太が脇から声をかける。「お疲れでしょうが、急ぐのがよろしいかと」

そのとおりで。今頃、バスを見失った真崎たちが狂ったように自分たちの行方を探していることだろう。

「よし。信太よ、まかせたぞ」

「ありがとうございます！」

午後五時。

夕暮れが雲を真っ赤に染めている。

一同は信太の案内で、コテージの裏にやってきた。

その辺りも生い茂った樹々のせいで薄暗い。

空の旅。

いよいよその秘密が明かされる。

ふと気づくと、鉄製の階段が眼前に現れた。

「さあ、このタラップをお昇りください。まもなく我が機は離陸いたします。どうかお急ぎください」

信太が急かすように昇れ昇れと促す。

まさかこんな樹々の生い茂る飛行場もないだろうにと、萌黄は文字どおり、狐につままれたような気持ちで、タラップに足を掛けた。

しかし、登り詰めるとそこには思いもかけないものがあつた。萌黄は、

「なあくんや」

と、がっかりともホツとしたともとれる声を上げた。

リフトである。

確かに空の旅といえなくもない。

リフトのケーブルはここを始点とし、樹海の中へと真っ直ぐに伸びている。

「ケーブルの上には、枝葉が傘のように覆い被さっていますから、いっさい空からは見えません」信太は得意げだ。「そしてそしてー、このリフトは京都と滋賀の県境に横たわる山々を横断しているのですー」

「すると終点は——」

「はい。大津です」

そういうことだったのか。萌黄は笑えてきた。

ガコンと大きな音がして、リフトを運ぶケーブルが動

き出した。

スキー場にあるようなペアリフトである。萌黄は最前列、つまり先頭のリフトに乗るといふ榮譽に浴した。

むんと並んで腰かけると座席はギシツと鳴った。新しくはないが、手入れはされているようだ。

振り向くと、仲間たちが次々とリフトに乗っていく。

上を見れば、アーケードのように被さった枝の間から空が見える。

リフトはゆるやかな登りで延々と動いていく。時には太い木をこするように、時には川のせせらぎの聞こえる谷間を越えて。

やがて山の稜線に到達した。

するとふたりの目の前に、忽然と巨大な湖が現れた。

琵琶湖である。

「うほおおおおっ」

萌黄とむんは同時に声を上げた。

まさかこれほどの景色を味わえるとは予想もしていなかった。そこだけ樹々がまばらだったのだ。おそらく信太の祖父は計算してリフトを作ったのだらう。なかなかしゃれた人だなと萌黄は思った。

湖の対岸は、萌黄たちの背後から差す陽光を受けて、まばゆいほどに朱に染まっている。

萌黄とむんは、うっとりとして景観に見入っていた。

むんがぼつりとつぶやいた。

「ここが、最終決戦の場なんやね」

萌黄は顔から笑みを消すと、じつと湖面の輝きを見つめていた。

終着点では、先回りした信太の部下たちが待っていた。萌黄たちは、彼らによって火の灯された宿泊施設へと案内された。広大な緑の敷地に大小さまざまなコテージが点在している。

管理棟に集合した萌黄たちを前に、例によって信太が熱っぽく説明する。

「こちらの『信太コテージ村』は現役ですから、居心地は良いかと存じます。皆さんには、まずはここで疲れを癒していただき、明日からの真佐吉討伐に備えていただきたいと思えます。いじよー」

それだけ言うと、アツという間に五十嵐の休む「コテージ」へと消えていった。

久保田は半分あきれ顔で、

「じつにマイペースな人だなあ。助けてくれたから悪くは言わんが、俺はどうも苦手だ」

時刻は午後七時。

遅い昼食を腹いっぱい食べたので、誰も晩ご飯をどうしようとは言わず、すぐに割り当てられたコテージへと

引き込んだ。それでも萌黄とむんは、今後のことを相談しようとして清香や久保田らと八時に待ち合わせすることにした。

コテージはログハウスになっていて、どの部屋も家族が泊まれるほどの広さがあったが、時節柄、宿泊者はおらず、各人が一軒ずつ利用できることになった。

もちろん、萌黄はむんと同室である。

「むん、シャワー、どうぞお先に」

「それではお言葉に甘えて」

萌黄は備え付けの冷蔵庫を開いた。あいにくとカラだ。「管理棟に自動販売機があったから、何か飲むもの、買うてくるわ」

「スポーツドリンクをお願い」

「あいよ」

萌黄は財布を握って表に飛び出した。

コテージ村の中は、歩くのに困らない程度に外灯がついていた。萌黄はバーベキューハウスの横を通って管理棟にたどり着くと、財布から百円玉を三枚出した。

お金を見たのは何日ぶりだろう。改めて観察すると、文字はどれも左右が逆である。それでも丸いから取り扱いに困ることはない。いや、この世界に放り込まれて十日。たった十日なのにすっかり鏡像世界に慣れてしまった自分に驚きを感じている。

硬貨を自販機に投入する。ボタンを押す。スポーツドリンクのミニボトルがごとんと取り出し口に落ちた。取り出す。もう一度押す。続けて二本目が落ちる。

なんら操作に困らない。

(元の世界に帰れたら、やっぱり最初は戸惑うやろか) そんなことを考えながら、ボトルを抱えて来た道に戻り始めた。

「萌黄さん」

突然暗闇から名前を呼ばれて、萌黄の心臓は止まりそうになった。

「え——ああ、久保田さん」

「何してたの？」

「ちよっと飲みものを買いに」

「ああ、そう」

久保田はズボンのポケットに手を突っ込んだ。

「なあ萌黄さん、ちよっといいかな？」

「何でしょう」

久保田はバーベキューハウスに向かう。萌黄も後についていった。

「ひとつ、君に訊きたいことがあるんだ」

屋根の下に入ると、久保田は前置きもなしに切り出した。萌黄の心臓は心なしが高鳴った。

「はい」

久保田は言いにくそうに膝を上下にさすっていたが、「いや、純粹に疑問に感じたことなんだが……、今朝、大学で君が作業員に倒されたとき、俺の耳にはつきりと聞こえたんだ。リアルの力を使え、とか何とか」  
萌黄の背中を冷たい汗が落ちた。

「……………」

「あと、甘えるな、みたいな声も。明らかに君の声じゃなかったし、周囲にそれらしき人物もいなかった。あれは俺の空耳かい？」

6

冷たい夜風がサーツとふたりの間に吹いた。

(聞かれてたのか……)

それもそうだと、萌黄は口許をゆるめた。

(久保田さんはすぐそばにいてたんやし)

ここまでやなと顔を上げたところ、久保田はくるりと背中を向けた。

「べつに答えたくなければ、答えなくてもいいよ。いや、きつと俺の空耳だったんだ。スマン！ 忘れてくれ」

久保田は言うのと、さっさと足を動かして帰り始めた。

「待つてよ！」

萌黄は追いかけて久保田の腕をつかんだ。

「説明します。いえ、説明させてください」

萌黄は久保田を、半ば強引にバーベキューハウスの屋根の下に連れ戻した。久保田は困った顔をしたが、逆らうことはしなかった。

萌黄は呼吸を整えた。

そして、思い切って打ち明けた。

「あの声は——PAIです」

「PAI？」

萌黄は羽織っているウインドブレーカーのポケットから携帯電話を取り出そうとした。しかし、いっしょに入っていた財布がひっかかり、地面に落ちた。

久保田は腰を曲げて拾い上げ、萌黄に手渡そうとした。まさにその時——。

キヤアアアアアアアアアアアアアアアア。

女性の悲鳴が夜の静寂しじまを破った。

「な、なんだ？ 誰だ？」

久保田と萌黄は声の方向に目を走らせる。

そこは立ち木が列をなしていた。暗くて判然としないが、声はその辺りからしたように思えた。

久保田が一步、屋根の下から出た時だった。

「あうっ」

立ち木の陰から意外な人物が、白衣をひらめかせながら飛び出して来た。

誰と問うまでもなかった。

「和久井さん……」

おかつぱ頭の京都工大筵瀉研究室の助手は、足を踏ん張って体勢を立て直すと、肩を怒らせた様子で立ちすくんだ。街灯の明かりが逆光になっているので表情が読めない。萌黄は手で筒を作って呼びかける。

「どうしたんですかあ？ まさか痴漢に襲われた？」

「萌黄さん、『まさか』はよけいだよ」

「すみません……」

なにしろさっきの絶叫はただごとではない。衣きぬを裂くという表現がピッタリくるような悲鳴だったのだ。

和久井助手は動かない。いやかすかにプルプルと震えている。萌黄と久保田はその近づきがたい様子に顔を見合わせた。

と、和久井助手の後ろにまた別の人物が現れた。やはり痴漢か、と萌黄が身構えた瞬間、新たな人物は呆れたような声を上げた。

「和久井さん。いい加減にしなよ」

むんだった。むんは和久井の背中を押しながら、久保田の前までやってきた。

「むん、シャワーを浴びてたんやないの？」

「窓の外を挙動不審な人影が通り過ぎたんで、あわてて服を着て、追っかけてきたんよ」

「むんさん。これはいったいどういうことですか。さっきのは和久井さんの声だったようだが」と久保田。

むんはそれに答えず、おかつぱ助手の前に回ると、さりげない口調で言った。

「あなた、久保田さんが好きなんですよ？」

すると、和久井助手の顔面がまるで化学反応を起こしたように真っ赤になった。

「え、そうなん？」

萌黄はとんちんかんな声を発して、和久井助手の顔を見、久保田の顔を見た。

むんはハアと一息吐くと、

「だから職場を放り出して、こんな危険な逃避行についてきたんよね。今だって久保田さんが散歩に出かけたのを知って、つかず離れず追いかけてきた。ふと見ると、久保田さんと萌黄が親しげに話してる。こんな時間に深刻そうな顔で。何を話してるんだろう。気になる。ちよつとだけ観察してみよう。木陰から見えないように。そうしたら久保田さんが萌黄に接近した。勘違いした和久井さんは思わず悲鳴を上げて——」

(そ、そうなん?)

萌黄は息を飲んだ。

「久保田さんは、彼女の想いに気づいてた？」

「うっ……まさか、とは思ってはいたが」

ガーン。萌黄シヨック。

(気づいてなかったのは、わたしだけ?)

秋の夜風が吹き過ぎていく。Tシャツ姿の久保田には肌寒いはずである。けれど彼の前でうなじまで真っ赤に染めた白衣の才女のほうが、この場には不似合いだった。突然、和久井はうつむいたまま駆け出した。萌黄に肩をぶつけながらも、そのまま一直線に自分のコテージの方角へと走り去っていった。はたらく白衣の残像を残して。

「……むん、なんもここで言わんでも」

萌黄が非難の視線を向けると、

「いいのよ」むんはきっぱりと言った。「彼女は自分からは絶対に告白せえへんやろうしね。わたしも見てて、イライラしてたんよ」

「そんなに前から気づいてたん？」

「アレ？ まさか萌黄は気づいてなかったとか？」

「くっ……気づいてました！」

「ウソやね」

萌黄はまたシヨックを受けた。バレてる。

「気づいてたら——まあ、いつか」むんはひとりで納得すると「じゃあ、先にコテージに帰ってるから」とふたりに背中を向けた。

「あ、待って」

萌黄は久保田との本題を思い出し、むんを呼び止めた。  
「むんにも聞いてほしい話があんねん」

7

ポケットから取り出した携帯電話を、しかし開かず、手の中でこね回しながら、萌黄はぼつぼつと話し始めた。「学園前のモデルハウスで朝を迎えた時、迷彩服が攻めてくるって言うたよね。あの情報は、突然わたしの携帯に現れた、見たこともないP A Iからもらったんよ」

「モジ君やなくて？」とむん。

「うん。彼はN A S Aで開発された特別なP A Iで、世界中の携帯を勝手に渡り歩いてきたんやて。電波や回線をつたって人の携帯から携帯へ、コンピュータからコンピュータへと旅をしてるんやて言うてた。だからとてつもない量の情報を彼は持つてる。それで、たまたま立ち寄ったわたしに危険を教えてくれたというワケやの」

萌黄は一息つくくと、すぐに早口で続けた。

「彼はP A Iの原則を踏み出した存在やから、人間に見つかったらヤバイ。だから黙つといてくれとわたしに頼んだ。わたしも情報をもらった手前、断るわけにはいかへんかった。でも……今まで黙つてて、ごめんなさい」  
萌黄は頭を下げ、さらに続ける。

「わたしが自宅でサキさんに撃たれた時も、彼は助けてくれた。そして問題の京都でも、絶体絶命の時にリアルのパワーを使えと、これ以上ないタイミングで助言してくれたんよ。まるで守護神みたいに」

「そのP A Iは、まだいてるの？」

萌黄は二つ折りになった携帯を開いた。液晶画面は塗り潰したように黒一色だった。

(約束破ったんで、どこかに行つてしもたんやなあ)

ところが見えているうちに、黒い画面の中央にうねうねと動く真っ赤な物体が現れた。それは急速に3D化し、画面から飛び出してきた。

わつと驚いて、萌黄は上体を引いた。

さらに屈託のない笑い声が萌黄を驚かせた。

《ハツハツハ。ひっかかったねー》

「ギ、ギドラ！」

赤い物体はギドラの舌だった。黒いと見えたのは、彼の口の中だったのだ。

《裏切り者には、お仕置きだっ》

萌黄は喉まで出かかった文句の言葉を飲み込んだ。

《むんさん、初めましてだね。ボクはギドラ。そちらの大きい人もよろしく》

「キングギドラ……」

突然湧いて出た、緻密で精巧なキングギドラのCGに、

むんも久保田も息を飲み、呆氣にとられ、呆然として、言葉を失った。

《なんで出ていかへんかったんよ、と聞きたそうだね、萌黄さん》

ギドラは、この場の主導権を握ったと言わんばかりに、得意げに三つの首を揺らしている。

《理由は単純明快。ここにいと面白いことに出くわしそうだからさ》

そんなギドラに初見のふたりはおそろおそろ顔を近づける。

「はー、よくできてるなあ。さすがNASA製だ」

感心する久保田を尻目に、むんは無言を通してている。

萌黄はそれが気になった。

《今はあんまり長居する空気じゃなさそうだね。それでは皆さん、またお会いしましょう》

ギドラは鱗をきらめかせると、煙のように消え去った。残された三人は、空中に飛散した金粉にしばらく目を奪われていた。

「——あれが本当にPAIなのかい？ 俺の知ってるのとはずいぶん違うな」

「知能レベルは相当高いと思う」萌黄が補足する。「わたしも最初は信じられへんかったけど」

むんが上体を起こした。萌黄は上目遣いに親友の顔色

を盗み見る。するとむんは、

「やめなさい。そんな目で見るのは」と萌黄をたしなめた。「秘密にしたのは理由あつてのことなんでしょ？」

「ごめんね」

「謝るなっちゅーの」

むんは拳を作つて萌黄の頭を軽く小突いた。

久保田も顔を上げる。

「まあ、PAIとはいえ、心強い味方のようだから、仲良くしとくに越したことはないな」

「そうね」サバサバした口調でむんが言う。そして自分の携帯を取り出して時計表示を見て、「そろそろ打ち合わせの時間やね。このまま行きましようか」

三人はバーベキューハウスを出て、何ごともなかったように、伊里江のコテージに向かった。

この辺りは山の裾野である。遠くに月に照らされた琵琶湖の湖面を望むことができた。

「あら、こんばんは」

途中で歩いてきた清香と合流した。四人はそのまま歩を進め、伊里江のコテージをノックした。

「……熱は引きましたが、本調子ではないので、このままで失礼します」

伊里江はソファで横になっていた。客の四人はダイニングテーブルを囲んで着席した。

メインの議題は、明日からどう行動すべきか、だったが、真佐吉がどこにいるのか判らない現在、実りある会合は難しい。

伊里江真佐夫が、天井を見つめながら言う。

「……紆余曲折はありましたが、リアルが天津に集まってくるのを知って、兄はきつと笑いが止まらないでしょう。自分の筋書きどおりになったと」

「悔しいな」ぽつりと久保田が言う。

「……彼は必ずコンタクトをとってきます」伊里江は続ける。「それを待っているのは、後手に回るでしょうが」

「お坊さんはどこにいるんでしょう」と清香。「あのおじいさんやお孫さんとも合流できればいいのにね」

萌黄はギドラに訊ねてみようかと携帯をテーブルの上に置いた。もはや隠し立てする必要はない。

「ギドラ、他のリアルさんたちの行方は判らへんの？」  
すると待っていたように金色の首がによきつと飛び出した。一本ずつ、ワン、ツー、スリー、と。

《アハハ、萌黄さん、知らなかったんだね。あの三人とも、携帯電話は持ってないんだよ》

がっかり。萌黄は肩を落とした。

「……その動物、何ですか？」

萌黄は伊里江と清香のために、もう一度説明しなければならなかった。彼女は、伊里江にも裏切り者と誹そしられ

るのを覚悟した。だが彼は何も言わなかった。不満そうに唇を尖らせはしたが、それ以上に未知の P A I に対する興味が勝ったようだ。伊里江の目は大きく見開かれ、萌黄の携帯を瞬きもせずに見つめている。

《ただ、いくつか面白い動きがあるよ》人間の感情など知ったことかと、ギドラは楽しげに話し続ける。《街角のカメラが捉えた映像によるとね、迷彩服の御一行がある場所を目指して動き出してる》

「それって、まさかココ？」とむん。

全員が身体を強ばらせる。

《残念。ハズレだよ》

「もう！ クイズやないんよ。どこだか早く教えてよ」

《ここから湖岸に沿って北に行つたところにある、堅田かたたの辺りさ》

「堅田——琵琶湖大橋のたもとやないの」

「そうか」久保田が指をパチつと鳴らした。「柊さんたちはそこに“着地”したんだな」

8

「堅田に行きましょう！」萌黄が叫ぶと、

「……安易には判断しかねますね」

伊里江が冷静に言葉をはさんだ。

「そうだな。飛んで火に入る夏の虫になるかもしれない。それこそ迷彩服の思う壺だろう」

久保田が言うと言得力が増す。萌黄はしゅんとなったが、心中に不満が残った。

《あのー。ちよつといいかな》

ギドラが声を上げた。

人間のおとなと遜色のない会話を交わすP A Iに、全員が、好奇と恐れの入り混じった視線を投げ掛ける。

《まだ話せる情報があるんだけどな》

「あるなら、もったいぶらずに話してよ」

萌黄が突っ込んだ。ギドラは長い舌をチロリと見せると、

《シビレを切らした米軍が動き出したみたいだよ》

「米軍——また戦闘機が飛んでくる!？」

《それはないみたいだ。向こうもなかなか戦略面で苦勞してるようで、爆撃しても本当にリアルを倒せたかどうか判らない。それでは困るといっているので、陸上部隊を差し向けることになったらしい》

「部隊ってつまり、迷彩服のアメリカ版か？」と久保田。

《そういうこと。彼らは鏡像世界が生まれた直後に、国内の米軍基地で編成されたんだ。さすがのボクにも彼らがどのくらいの規模なのかは判らない。ただ、君たちが京都にいた時には、すでに名古屋方面に上陸を完了して

いたらしいことはハッキリしてる》

萌黄は寒気を感じた。また敵が増える——。

《日本政府も君たちの転送が失敗したことで面目を失ったようだ。国会は空転してるし、アメリカの強攻策に対しても、抑えることはできないみたいだね》

「誰か、真佐吉さんの居場所をつかんだ人はおらへんの？ あなたはどうなん？」

むんが訊いた。そうだ、すべてのターゲットである伊里江兄の居所だ。

《おそらく誰も捕捉できてないと思う。それらしきコードネームも、彼らのやりとりする会話やメールに現れないからね。かくいうボクもさ。真佐吉さんの電話やメールは、常に完璧なセキュリティで守られている。京都工大で若手研究員を脅迫した電話だって、発信元は全くつかめなかった》

「……兄は、転送装置を持っています。ということは、装置を動かすための電力が供給できる場所にいるはずですよ」

「電力会社か？」と久保田。

「……電気を大量に使っても怪しまれない施設ですね」

「滋賀県にそんな場所あったかなあ」

「ダムとか——」

「どうか、キングギドラさん」むんが訊ねる。

《県内には数カ所あるよ。でも治水用を除いて、大津市内となると見当たらないな》

誰もがハアとため息をついた。

その直後だった。

ズズズウウウウウウウウンン。

テーブルが小刻みに震えたかと思うと、床がドンと激しく上下した。女性たちが悲鳴を上げる。

コテージの壁や床がギシギシと軋み、空気までがビリビリと振動している。皆はテーブルの下に潜り込んだ。

萌黄はテーブルの脚をつかんで目を閉じていたが、頬に風を感じて薄目を開いた。

目の前には明るい色の板壁があるだけだ。窓はない。それでも萌黄は顔に圧力を感じた。

『……………おおおおおおお……………』

「柗さん！」

萌黄は理解した。それは柗拓巳の声だった。

しかし声はすぐに消え、揺れも徐々に治まっていった。

「皆さん、怪我はありませんか」

久保田が呼びかける。女性たちは互いの無事を確認しながら、そろそろとテーブル下から出てきた。

「今の地震、柗さんがやったんよ！」萌黄は全員の顔を見て言った。「清香さん、エリーさんには聞こえへんかった？」

「……いいえ」「全然」

(そんな)

萌黄はがっかりしたが、あきらめず、

「ねえ、柊さんは今この瞬間、誰かと戦ってるんとちゃうかな。応援に駆けつけたほうがいいかも」

「でもね、萌黄」むんが諭すように、「もう夜中よ」

「そんな関係ないよ」

「あるよ。だいいち、どうやって堅田まで行くの」

「車でも借りて」

「さつき、信太さんに訊いたけど、ここには一台もないんやて。仮にあつたとしても、ライト灯して走ったりしたら、すぐに衛星カメラに発見されるって」

「なかったら歩いてでも行くべきや。朝になってからじゃ、やつぱり見つかると思う」

話は平行線をたどるばかりだった。

萌黄は焦りを感じた。

柊の声には、ぞつとするような響きが含まれていた。

迷彩服か米軍に包囲されたのではないか。なんとか逃げようと地震を起こしたのではないか。

不満が募る。萌黄はポケットに入れたままのスポーツドリンクを飲もうと、力まかせにキャップを回した。

「痛ッ」

キャップは回らず、強く握った指がキャップの上をこ

すっただけだった。

「逆よ」

むんがすげなく言う。そう、この世界ではネジ巻きの方向は反対なのだ。萌黄は飲む気を失った。

皆の顔に疲労の色が浮いていた。

ここまでと見て、年長者の久保田が場の意見をまとめた。

いま動くのはかえって危険、しかし日が昇ってから移動するのもマズかろうとして、夜明け前に周辺の様子を観察しながら、堅田に向かおうということに落ち着いた。

（悠長過ぎる。あと五日しかないというのに……。やっぱりヴァーチャルの人とは感じかたが違うかな）

萌黄は決心した。こうなったら、ひとりでも行こうと。

9

午前零時。

萌黄はベッドから抜け出した。ウインドブレーカーを手に持って、リュックを背負う。携帯の画面では、穏やかな大海原に浮かぶ小島の上で、ギドラとモジがオセロに興じていた。

カーテン越しの月の光で、むんの布団が規則正しく上

下するのが見えた。

萌黄は、横になる前に書いておいたメモをテーブルに置く。『ごめん、先に行きます。萌黄』

足音を忍ばせてドアを開き、コテージの外に出る。

夜気はかなり冷たい。上着のファスナーを上げ、広げた風防を頭にかぶせる。一瞬、コテージの暖気の中に戻りたい衝動に駆られたが、萌黄は思いを振り切るように、夜の闇に向かって歩き出した。

コテージ村のメインストリートまで来ると、月光に映える湖面を見晴るかすことができた。右に目を動かせば、空中に明かりが並んでいる。琵琶湖大橋だ。

改めて萌黄は、あれはヴァーチャルの琵琶湖なのだ。再認識する。頭の中の地図を裏返す必要があるのだ。

通りの左の一段下がったところに駐車場がある。信太が言ったとおり、一台の駐車もない。

再び、琵琶湖大橋を見る。近そうに見えて遠そうだ。到着する前に夜が明けてしまうかもしれない。

駆け足になりかけた時、すぐそばのコテージにつながる小道から降りてきた人影とぶつかりそうになった。

「萌黄さんじゃないの。今あなたのコテージに行こうとしてたところよ」

「清香さん」

「よかった。暗い道を歩くのが怖くて、今まで迷ってた

の。思い切って出てきたんだけど、会えてヨカッタあ」  
しーっと萌黄は口の前に指を立てる。清香は舌を出して声をひそめたが、萌黄に会えたのがよほどうれしいらしく、握った萌黄の手を離そうとしない。

「じつはね、おじさまと連絡を取りたいのよ」

「おじさま——雛田さん」

「そう。大学から逃げる時にはぐれてしまったの。でも萌黄さんからは、逆探知でわたしたちのいる場所が敵に知れてしまうって言われたでしょ。だから通話もメールも我慢してたんだけど」

状況は今も変わっていない。普通の携帯から電話をかけるのはマズいのだ。

しかし萌黄の携帯なら——。

「ギドラ、取り込み中、悪いんやけど」萌黄は自分の携帯を出し、画面に呼びかけた。「お願いがあんねん」

《なんだい？》

ギドラはオセロ盤を前に、両腕を組んで座布団に座っていたが、首を一本だけこちらに向けて返事した。

「あなたなら、誰にも悟られないように、メッセージを相手の携帯に送ることができるよね」

《雑作もないさ》

萌黄は清香を振り返った。

「だそそうです」

「うわー、ありがとう」

清香は早速、自分の携帯でメッセージを作成した。

『おじさまへ わたしは天津にいます。清香』

「打ったわ。これをどうすればいいの？」

すると、いきなり清香の携帯がしゃべり出した。

《ボクがこのメッセージを持って届けに行くのさ》

いつの間にか、ギドラは萌黄の携帯から、清香の携帯に移動していた。

《ふむ。お届け先のメールアドレスはこれか。よし、それじゃ行ってくるね》

金色の煙がぼわんと立つと、ギドラは清香の液晶画面から消えた。

「……スゴいわねえ、とてもP A Iとは思えない」清香はため息混じりに、「萌黄さん、いいわね。こんな素敵な召使いがいるなんて」

「いつもこんなに従順だったらいんですケド」

萌黄は苦笑いした。

「ところで、どうしてここにいたの？」

「え？」訊ねられた萌黄は困った。しかし隠せるものではない。「じつは——」

萌黄は正直に話した。ひとりで柀たちを助けに行こうとしていることを。

「スゴい、スゴい」清香はあふれんばかりの感動に顔を

ほてらせる。「リアル戦士の結束が、あなたを呼んだのね」

「いえ、そんな大げさなものじゃ……」

「わたしもいっしょに行つてあげようか？」

萌黄は我が耳を疑った。

ひとりで行くことに不安を感じていた矢先である。ましてや彼女もリアルなのだ。萌黄は思わず答えていた。

「来てくれたら、うれしい」

「オツケー、じゃ出発！」

清香は右向け右で、コテージ村の入口に向かって歩き始めた。萌黄も遅れじとついていく。

ふたりは県道に出た。琵琶湖に下っていく道を進む。

辺りは暗い。背後は山なので暗いのは当然だが、道の両側には住宅が密集している。しかし家々の窓に明かりはなかった。午前零時を回ったとはいえ、普通ではない。

(みんな、死に絶えたんやろか)

あるいは家の奥でじっとしているのか。

萌黄は悪寒を覚えた。早く抜けてしまいたい。萌黄は自分が墓場に迷い込んだ気がした。

「ねえ、萌黄さん」清香が弾んだ声で振り返る。彼女は街の雰囲気とは無縁だ。「どうして歩いてるの？」

「どうしてって……乗っていく車もないし」

「違うわよ」

「え？」

「空を飛ばないの？ ほら、わたしを助けてくれた時のように」

萌黄は本当に忘れていた。自分の能力を。

「魔法のホウキがないと無理なのかしら」

「いいえいいえ」

萌黄はそう言うと、ポンと地面を蹴った。頭の中では鳥になったイメージを描いた。

彼女の身体はスーツと空に舞い上がった。そして大きなサインカーブを描きながら、電柱の上に飛び乗り、再びジャンプする。まるで体重がなくなったように軽い。

そのまま空気の流れに身をまかせていると、両足は羽毛のようにふんわり道路に着地した。

振り向いて清香に手を振る。ふたりの間は五十メートルも離れていた。

「ス、スゴい！ スゴい！ カッコいいー」

清香が叫びながら駆けてくるので萌黄はまたシートと注意しなければならなかった。

「いいなあ、あんなに飛べたら気持ちいいだろうなあ」

「あの一、清香さんもリアルなんでしょ？」

「え……あ、そうか、わたしにも才能があるのか」

「才能というか、たぶんできるはずですよ」

「教えて！ 飛べたら堅田ぐらい、すぐだもんね」

教えを乞われ、萌黄はイヤな予感がした。一刻も早く堅田の柵の元へ向かいたいののに、清香は自分も飛んでみせるから、要領を教えてくださいとせがむのだ。

彼女のファンとして、むげに断ることもできない。萌黄は逸る気持ちを抑えつつ、清香の練習に付き合うことにした。

ところが。

予想外に、清香の飲み込みは速かった。

「身体にまとった空気で身体を押し上げるイメージ」とアドバイスしただけで、ものの十五分も飛び跳ねていると、目指した屋根に着地できるまでに上達したのだ。

(一芸に秀でる人は、何やってもスゴいんやなあ)

感心しているうちに、清香は屋根を伝って、勝手に遙か遠くまで飛んでいってしまった。萌黄はあわてて後を追う。

コテージ村から堅田までは直線距離で十キロ。それをふたりは、わずかに十分で踏破した。

移動中には、営業中のコンビニはおろか、一台の車、ひとりの人間にも出くわさなかった。

(清香さんがいっしょじゃなかったら、寂しくて耐えられへんかったかも)

萌黄は心の中で感謝した。その清香は屋根から屋根へ、ビルの屋上へと、じつに楽しげに飛んでいく。初めて遊園地に連れてきてもらった子供のようにはしゃぎっぷりである。

琵琶湖大橋が近づいてきた。

「清香さん、ちよつと待って」

ふたりはスーパールの屋上に舞い降りた。看板の間から橋の明かりが見える。

携帯の時計表示は、午前一時。

「なんだか焦げ臭いわね」清香が鼻をつまんだ。

「あれを見て」

萌黄は前方を指さした。

橋へと通じる国道の上に、妙な形の鉄骨が横たわっている。熱が加えられたようにあちこちが曲がっており、黒く煤<sup>すす</sup>けて見えるのは、燃えた痕だろうか。

「あれって観覧車やないですか」

「ホントね。でもどうして倒れてるの」

この辺りには、名物の巨大観覧車があったはずだ。

周囲を眺めると、そこかしこに燃えくすぶった車が横転していた。いくつかの建物は、外壁の一部に破壊された跡が見られた。

萌黄はごくりと唾を飲み込む。

「戦いがあったようですね、ここで」

「戦い？ 誰と誰が？」

「たぶん、柊さんたちと——」

その時、倒れた観覧車の上にひとりの男が現れた。長身の男は、スポットライトを浴びるように、外灯の下に立ち止まった。

「柊さんや！」

萌黄は声を上げた。

柊は湖を渡る風に悠然と袈裟をはためかせている。光を浴びたその姿は映画の中から抜け出したようでもあり、萌黄はこの世のものとは思えない美しさを感じた。

柊は真っ直ぐ前を睨み、両拳を握ったままじっと動かない。

「何してはるんやろ」

「ちよつと怖い雰囲気よね」

二、三分も経過したろうか、柊の視線の先で動きがあった。数人の迷彩服がマシンガンを構えて出てきたのだ。

彼らは扇形に展開しながら柊に迫る。そして合図がなされたのか、一斉射撃を始めた。

ところが柊はピクリとも動かない。

銃弾が彼の身体に突き刺さり、柊は無惨にも蜂の巣に

なってしまった——かと思われた瞬間、銃弾は彼の足許に、ぼろぼろとこぼれ落ちたではないか。

「空気や！ 空気をクッションにしてるんや」

マシンガンから放たれた銃弾は、柎の前で次々にスピードをなくし、寿命の尽きたセミのように落ちていく。

（あんな技を身に付けてはったんや。いつの間に……）

マシンガンでは倒せないと悟った迷彩服のひとりも、今度は手榴弾を投げた。

「危ない！」

しかし手榴弾は柎の上げた手で受け止められた。いや実際には触れていない。まるで空気の腕を操るように、頭上で手榴弾を“つかんだ”のだ。

（リアルパワーの使いこなしかたは、エリーさんの比やない！）

柎は、エア・ハンドで握った手榴弾を投げ返した。

激しい爆発で迷彩服の身体が四散した。

別の方向からバズーカ砲が発射された。しかしそれも空気の壁に方向を変えられ、琵琶湖の水面に落ちていった。

柎はたんと敵の攻撃を処理していく。彼には無駄な動きというものがまったくなかった。

（二十一世紀によみがえった弁慶）

萌黄はそんな連想すらしてしまった。

柊は足許の観覧車から、一本の鉄骨を素手で剥ぎ取った。長さ十メートルもあるそれは、とても人間ひとりで動かせる代物ではない。

柊はそれをいとも簡単に担ぎ上げると、空中高く放り上げた。鉄骨は弧を描いて落ちてくるかと思いきや、迷彩服たちの頭上で静止した。

おそらく迷彩服たちはその光景を信じられない面持ちで見つめているだろう。誰もが逃げるのを忘れて、空に浮かんだ鉄骨を見上げている。

柊は人差し指を立てた。そして迷彩服のひとり指さすと、鉄骨は目にも止まらぬ速さで、選ばれた迷彩服を串刺しにした。いや、正確には、潰した。

「うぐっ」

清香が手で口を押さえながら後ろを向く。萌黄も込み上げてくる嘔吐感を必死で耐えていた。

（虫も殺せない顔をした柊さんが、まさかこんな……）

柊は次々と鉄骨を宙に投げると、ひとりひとりの頭上に振り下ろしていった。

迷彩服たちは的確に消されていく。一瞬にして潰され、砂になった彼らは、自分が死んだことに気づく暇もなかったに違いない。

萌黄が初めて見た、本格的なリアル対リアルキラーズの戦闘であった。

清香は萌黄の背中で、顔を両膝の間に埋めて震えている。萌黄もできれば見ていたくはなかった。逃げ出したかった。

それでも萌黄は両者の戦いから目が離せなかった。

リアルキラーズは後退を余儀なくされていた。すべての武器が通用しないではどうしようもない。たったひとりのリアルのパワーは圧倒的であり、迷彩服の仲間たちは次々と倒されていく。

(もう十分や。はよ逃げ！)

これでは人間とアリの戦いである。いや、戦いにもならない。萌黄は自分にとっても敵であるはずの迷彩服たちが哀れに思えた。

それでも彼らは諦めきれないらしく、包囲を解こうとしない。中途半端な状態で睨み合いが続く。

「うわっ」

迷彩服のひとりが悲鳴を上げ、ふわりと空中に浮き上がった。萌黄は柎を見る。柎は前に突き出した右手をゆっくりと上げていく。またエア・ハンドだ。リアルの超能力を前に、ヴァーチャルは逃げる術がない。

柎の手が肩越しに後ろへと動いた。

「うわぁーっ」

迷彩服の男は絶叫を残して、はるか夜空に吸い込まれていった。

十秒後。柊の背後にある琵琶湖大橋、その橋桁の辺りで、湖面に水しぶきが上がった。

リアルキラーズは一斉に逃げ始めた。「本体に合流し、出直しだ」などと叫んでいる。彼らの辞書に『諦める』という言葉はない。諦めてしまつてはリアルキラーズの実存在意義がなくなる。

街は静かになった。ただ、湖岸に打ち寄せる波の音が聞こえてくるだけ。

横倒しになった観覧車の上に、柊の姿はすでにない。

「ねえ、清香さん、清香さん」萌黄は振り返った。「急いで降りましょう」

「どうするの？」

「柊さんと合流するんですよ」

「イヤ」清香は両手で胸を押さえながら激しく拒否した。

「わたしは行かない。あんなコトする人のところには」

「しかたがなかったんですよ。だって——やらないとやられるし」

「あなたも？ 萌黄さん。あなたも同じ人間を相手にあんなことするの？」

ヴァーチャルとリアルは同じ人間なのだろうか。萌黄

の心に、今さらながらそんな疑問がよぎった。

「……………」

「わたしにはあんなの許せない。与えられた力は、人の怪我を治したりすることにこそ使うべきよ。人を殺めたりしてはいけない」

萌黄だって清香の考えに同意したい。

「清香さん、きつと柊さんは追いつめられたんよ。そやから戦うしかなかったんやと思う」

「やりすぎよ！ 過剰防衛よ！ 怪我ぐらいいでも命に関わることは知ってるはずでしょ？」

同感だった。しかも僧が殺生をおこなったのだから、清香でなくても受けた衝撃は大きい。

清香は立ち上がると、萌黄に背を向けた。

「わたし、帰ります」

「……………」

「ごめんなさいね。萌黄さんを責めてもしようがないのにね」

そう言って清香はコンクリートの床を二、三步あるいて立ち止まった。しかし萌黄が追ってこないと知ると悲しそうに首を振り、固い床をポンと蹴って、夜の闇の中に消えていった。

(またひとりかあ)

萌黄はゆっくりと立ち上がると、看板の間から顔を覗

かせ、耳をすました。リアル耳には人の気配が感じられない。

萌黄はスーパールの屋上から路上へと飛び降りた。

辺りを警戒しながら、ひしゃげた観覧車に近づく。幼少の頃、彼女はこの大観覧車に乗った記憶がある。直径百メートル以上もある巨大な代物を、どうやって倒すことができたのか。

柘の姿はどこにもない。萌黄は声を出して呼びたかったが、どこに敵の耳があるか判ったものではない。黙って奥へと突き進む。

ここにはさまざまな遊戯施設があったはずだ。しかし今は観覧車を除いて、それらしき建物は見当たらない。あるのは広い駐車場だけだ。その向こうに喫茶店のような建物がある。しかし明かりは灯っていない。

ぞくぞくするほどの静けさ。萌黄はとりあえず、早足で喫茶店に向かうことにした。

駐車場の真ん中を横切る時、

(いま狙われたら隠れようがないわ)

と肝を冷やしたが、幸い何ごともなく、店の前に到着した。

柘はここにいるのだろうか？

店の入口のシャッターは上がっていた。ガラスのドアを手で押すとギーーツと音が鳴った。

「——もしもし」

中からの応答はない。萌黄は勇気を出してドアを押し開いた。

外からの光に頼って店内を見回す。テーブルや椅子はすべて部屋の端に乱雑に積み上げられていた。

カウンターの奥が、家屋の中へと続いている。今そこからかすかな光が漏れていた。やはり柵はここにいるに違いない。萌黄は足音を忍ばせて、前へと進んでいった。すぐ前に壁があり、通路が右へと続いている。

萌黄が顔をそっと覗かせた時、

「誰だ！」

と鋭い声があった。と同時に萌黄は首をつかまれ、身体を壁に押しつけられた。

「——萌黄、さん？　萌黄さんじゃありませんか!？」  
柵だった。

12

萌黄の首に食い込んだ力がゆるんだ。

「ど、どうしてこんなところに？」

手を離れた柵は、心底から驚いた表情をしていた。

萌黄は激しく咳き込み、すぐにはしゃべることができなかつた。

「すみません。あなただとは思わなかったもので」

「いえ——げほっ——いいんです」

「萌黄さん、おひとりですか？」

柘は油断のない視線を萌黄の背後に走らせる。

「——はい、わたしだけです」

清香の名誉のためにも黙っていようと萌黄は決めた。

「そうですか……。まあ、どうぞこちらへ」

柘は萌黄を奥へと案内した。思ったとおり、家屋は前半分が喫茶店、後ろ半分が住居になっていた。

狭い三和土たきがあつたので靴を脱たごうとすると、

「履はいたまままでいてください。いつでも外に飛び出せるように。私も土足です」

敵に対する警戒を怠るなということだ。萌黄は爪先で床を叩き、気持ちだけ土を落として、板の間が上がった。

「適当に腰かけてくださいね」

萌黄はキッチンに立っていた。テーブルと椅子がある。

「えっと、何か飲みますか？」

彼にしては珍しく落ち着きのない口調で話しかける。

「いえ、お気遣いなく」

萌黄にしてもまだ動揺が治まっていない。

「もしかして」柘がハツとした顔を向けた。「私の姿をどこかからご覧になっていたのですか？」

「——ええ、まあ」

柊は背筋を伸ばすと、ため息をついた。

「そうでしたか……さぞや驚かれたことでしょう。私も自分にあんなことができるとは想像もしていませんでした」そして向かい側の椅子を引いて腰かけ、「あなたの目に私はどう映りましたか？」

萌黄は言葉に窮した。しかし上目遣いに自分を見る視線に耐えられず、ぼそりと感想を述べた。

「スゴいなあと」

「スゴかったですか？」

「リアルパワーを自在に使ってはるなあと思いました」まるで先生を前にした子供の答えである。しかし柊は真剣な面持ちで頷いた。

「とにかく必死でした。惨いことをしたたと自責の念でいっぱいですよ。今になって言っても遅いですが……。人間なんて弱いものです。いざとなると命が惜しい、生きることへの執着心が私から冷静さを奪い去ったのです」

「判ります」萌黄も言わずにはおれなかった。「大学を出る時、作業員のひとたちの攻撃を、わたしもリアルパワーではね除けましたから」

「しかし私は僧侶の身——」柊は両手で顔を覆った。

「修行が足りませんでした」

萌黄は清香を帰したことを後悔した。無理にでも引き

止め、柊の今の言葉を聞かせたかった。

「でも、萌黄さんはどうしてここに？」

柊が最初の質問を繰り返した。

「地震です。九時頃に起きた地震、あれは柊さんが震源だったんですね」

「そうなんですか？ 私はご存知のように地震の起こしかたを知らないので判りませんでした」

「地震に乗って、柊さんの声が聞こえてきたんですよ。」

聞こえたのはわたしだけですけど」

「声が？ へえ、どんなことを言っていましたか」

「うおおつていう叫び声みたいな」

「なるほど」

「それに、迷彩服たちがこの辺りに集結しつつあるという情報が入ったので」

「私の身に危険が迫っていると、そう推理してくださいましたのですね。ありがとうございます！」

柊はテーブル越しに萌黄の手を握った。萌黄は顔を赤らめた。

「あの、齋藤さんたちはいつしよじゃないんですか？」  
手を振りほどくと、あわてて話を逸らした。

「それが……京都を無事に脱したところまではよかったです。ですが、県境を越えたところでバランスを崩し、三人ともバラバラに落ちてしまったのです」

柘は悔しそうに拳でもう一方の手の平を叩いた。

「そうだ。萌黄さん、あなたの話を聞かせてください」  
乞われて萌黄は昨日一日のことを話した。大将が地震を起こしたこと。大将の仲間がバスで侵入し、自分たち仲間は彼らとともに大学を逃げ出したこと。見つからないよう、密かに山越えしたこと、などなど。

「明日には、みんな堅田に来てくれるでしょう」

「そうですか……ありがとうございます、ちよつとマズいかも知れません。なぜなら今ここはリアルクリアーズに包囲されています。こんなところに皆さんが来るのは大変危険です」

そのとおりだ。萌黄は不安になったが、

(清香さんが、きつとみんなに知らせてくれるはず)

と思い、柘にも彼女のことを教えようと考え直した、その時だった。

〈うーん〉

家の奥からくぐもった人声がした。

「——誰か、いるんですか？」

萌黄が訊ねると、柘は明らかに狼狽した。

柘は落ち着かない素振りや腰を浮かした。そんな彼に

萌黄が声をかける。

「いま声がしましたよね。まさか、裏から敵が——」  
柘はハツとしたようだった。目だけを萌黄に向けると小さく頷き、そこにいなさいと手で合図した。

萌黄の全身にドツと汗が噴き出した。柘が演じた戦闘シーンが脳裏によみがえる。映画ではない現実。まさかあれが再現されるのか？

柘は足音も立てず、しかし敏捷な動作で廊下に出ると、そのまま奥へと消えて行った。萌黄はただ全身を耳にして、次に起こることを待っていた。したたる汗を拭いもせず、椅子にかじりつきながら。

一分、二分、……

何も起こらない。息詰まる時間は刻々と過ぎていく。

反対の壁に目を走らせる。外側から格子のはめられた窓と、流し台の横の勝手口。錠は鎖まで掛けられている。さっきの声がかもしも敵の侵入だとしたら、こんなところでぐずぐずしてはいけないのでは？ 焦りが徐々に募っていく。

三分、四分、……

首筋が痛み出した。あまりの緊張に身体じゅうの関節が悲鳴を上げ始める。もう限界だ！

萌黄は思い切って腰を上げた。摺り足でテーブルの角をまわり、壁に背中を押しつけ、廊下の奥をうかがう。

聞こえてくるのは、窓越しの波の音ばかりである。萌黄はどうしていいのか判らず困った。

汗でべとついた手で、ポケットから携帯を取り出した。祈るような気持ちで液晶画面を開くと、こんな時に限ってギドラの姿が見えない。モジもない。

(役立たず！)

思わず苛立った気持ちに逆に勇気を得て、萌黄は柵の後を追おうと決心した。携帯を荒々しく仕舞い、顔を再び廊下の奥に向け、えいやっと足を踏み出した。

入口に吊るされた暖簾よりも姿勢を低くし、ヤモリのように壁に張り付きながら廊下に出る。

廊下の奥は大した奥行きがなく、両側にドアが見える。今ドアはどちらも開いている。廊下は明かりがついているが、部屋はどちらも消灯されているようだ。

萌黄は背中を壁にくっつけながら進んでいく。隣室のドアが近づいてくる。

向かい側の部屋の中が視界に入った。段ボール箱がいくつも積み上げられている。しかし何げなく部屋の床を見た時、萌黄の身体を戦慄が貫いた。

くしゃくしゃになった一そろいの服が落ちていた。その手足の部分からは砂がこぼれ落ちていた。

もはや原型をとどめていないが、死体だった。

「——萌黄さん」

硬直する萌黄の耳が、柎の声を捉えた。

反対の部屋だ。萌黄は衝動的にそちらへ駆け込んだ。

しかし暗い部屋の中は何も見えなかった。

「どこ？」

暗闇に問いかけた途端、背後から太い腕が首に巻き付いた。彼女にはそれが柎の腕だとすぐに判った。

えっ？　と思う間もなく、左の二の腕にチクリとした痛みを感じた。

ウツとうめき声を漏らす。と、首に巻かれた腕はすぐに解かれ、萌黄は床に両手両足をついた。

スイッチが押され、電灯がともった。

明かりの中で萌黄は予想もしなかった光景を見た。

そこは畳敷きの六畳間だったが、萌黄に足に向けてふたりの人間が横たわっていたのだ。

ひとりには、齋藤老人。

ひとりには、ハジメ。

眠っているのか、ふたりとも目を閉じている。

「うーん」

ハジメが軽く寝返りを打った。

そうか、あの声は彼の寝言だったのだ！

萌黄は左腕を見た。そこには針で刺された痕があった。

「萌黄さん、どうか聞いてほしい」

柎。彼は萌黄の脇に膝をついた。萌黄はうつろな目を

彼に向けた。

「私もあなたもリアルです。この鏡像世界の人間ではありません。いずれこの世界を破滅に導く時限爆弾のような存在です。我々が望んだわけでもないのに」

柊は鋭い視線を萌黄に注ぐ。萌黄は言葉を発しようとするが、口が痺れたように動かない。

「憎んでもあまりあるのは伊里江真佐吉。人類史上最大の悪人。そんな男が、みすみすリアルを元の世界に戻せる転送装置を後生大事に置いておくと思いませんか？ 私はすでに破壊されていると読んでいます。つまり、彼の行方を探そうとするあなたがたの苦労は、まったくの徒労に終わるでしょう。私は諦めることを提案したい」

萌黄は。パク。パクと口を動かす。

「ああ、あなたはこう言いたいのですね。元の世界に戻らない限りはこの世界にも救いはない。引いては、同時に爆発するリアル世界にも救いはないのではないか、と教えてあげましょう。それは誤りです。我々リアルもこの世界で生きていくことを考えるべきなのです」

萌黄の肘が折れ、どうつと頭が畳に落ちた。柊はそんな萌黄に優しく手を貸し、畳の上に横たわらせた。

「あなたに謝らねばなりません。あなたが感じたという地震、あれは私が意図して起こしたのです」

萌黄は大きく目を見張った。

「そうです。私は以前から地震を起こす方法を心得ていました。それだけでなく、早いうちからリアルパワーの使い方を修得していました。おそらく私ほどパワーを自在に使えるリアルは他にいないでしょう。しかしそのことを他人に知られなくなかった。だから黙っていました。そのことについては謝ります。許してください」

「……………」

「それからもうひとつ、今あなたに注射したのは麻酔剤です。二十四時間は起き上がれないでしょう。ただ、意識はしばらく保つはずです。だからできるだけ手短にお話します」

柘は尻を畳に落とすと、疲れた声で語り始めた。

「私はね菮黄さん、僧侶でも何でもありません。津山市内の大学病院に勤務する一介の薬剤師です。スキンヘッドは単なる趣味なのです。」

世界がひっくり返ったあの日、私は病院で当直していました。明け方、トイレで用を足して部屋に戻ろうとしたところ、視界が突然ねじれ、私は深い穴の中へと落下していきました。そして気がつくくと、間取りの左右逆転した病院の廊下に倒れていたのです。……いま思い出しても、よく正気でいられたなと思いますよ。私は自分の頭がどうかなくなってしまったと疑いましたから。

このままじゃいられない。そう感じて私は、薬品室に

忍び込み、身を守るのに適当と思われる薬を持ち出し、そのまま病院から逃げ出しました。朝になって誰かに見つかったら、それこそ正気を保てないと思ったからです。萌黄さん、あなたに打った麻酔剤も、そのとき持ち出したものです」

萌黄は頬さえ動かさない。それでも頭の中は冴え冴えとしていた。

「病院を後にした私は、人通りのない夜明けの街をふらつく足取りで自宅へと向かいました。左右が入れ替わったというのによくたどり着けたと思います。いや意外に歩きやすいものでしたね、完全なる正反対というのは。」

自宅に戻った私は、一步も家からでませんでした。家族もおらず、もともと友人のいない私には訪問者もいません。親の遺してくれた一戸建ての家で、日がな左右の入れ替わった庭を眺めながら、これからどうしようかと途方にくれていました。いくら考えても答えが出ないので、子供の頃からやっていた空手の型をひとり庭でやつたりして……。そんなある日、津山市に比較的大きな地震がありました。私はそれが自分の起こした地震であることを知っていました。まったくの偶然ですが、丹田に力を込め、気合いととも地面に突きを入れた時、それが起きたからです」

柊は言葉を切った。その目が萌黄を見つめる。

「私は、リアルもこの世界で生きていくべきだと言いました。そのための方法がたったひとつだけあるのです。萌黄さん、あなたも気づいているでしょう？ 体内に蓄積されたエネルギーを地震を起こして吐き出し続けられ、リアルだってこの世界で永遠に生きることが可能です。そしてそれが可能なのは、私とあなただけです」

柊は深く息を吸い込んだ。  
「萌黄さん、どうか私と結婚してください。そして同じ身の上同士、この世界で手を取り合って、共に生きていきましよう」

14

薬に言葉を奪われた萌黄の前に、柊は一方的にまくしたてる。

「このヴァーチャル世界にいる限り、リアルは超人です。そのメリットを捨ててまで、リアル世界に戻るなんてバカげてますよ。我々は無敵なんです。我々ふたりがタッグを組めば怖いものありません。世の中を思い通りに動かすことだってできるのです。何者にも縛られず、我々にとって住み良い世界を作ることだって可能です！

ね？ どうです、魅力ある話でしょう？」  
しきりに『我々』を連呼する柊拓巳。その舌が回れば

回るほど話の内容は薄っぺらになっていく。萌黄はそう感じた。

「でも我々の前には避けて通れない敵がいる。伊里江真佐吉。彼が社会に対して抱く恨みは相当深いらしいね」  
いつしか口調が馴れ馴れものに変わった。

「リアルが全て殺され、彼が本懐を遂げられなかったとしても、元の世界に舞い戻り、再度、鏡像世界を作られようものなら、これはもうイタチごっこだ」

柊の言い分は矛盾している。真佐吉が元の世界に戻るには転送装置が必要である。しかし最前、真佐吉はすでにそれを破壊したろうと断定した。彼は思いつきで都合のいい論理を組み立てているだけだ。萌黄を自分側に引き込むために。

「俺の考えはこうなんだ」柊は身を乗り出した。「真佐吉に対して妥協案を呈示する。何も地球を丸ごと吹ッ飛ばす必要はないじゃないかと説得するんだ。気に入らない奴らがいるならそいつらだけ消せばいい。北海道を消したようにね。なら、リアルは何人も必要ない。そう言い聞かせ、確保してあるリアルを譲り渡す用意があることを真佐吉に示すわけだ」

萌黄は眼球だけを動かして、眠り続ける齋藤とハジメを見た。柊はそれを察すると、

「そうだよ。彼らは交渉のための人質だ。ここに到着し

た時に、君と同じ葉で眠ってもらった。さらに君の後を追って他のリアルたちが来てくれるなら大助かりだ。彼らにも人質に加わっていたらどう。真佐吉の弟もいたね。彼が手の内になれば、交渉は成功したも同然だ」

萌黄は動けないことが悔しかった。動けたらこの男の頬を張っていただろうに。

（徳の高そうなお坊さんだと思つて油断してた！）

「交換条件はもちろん、俺と萌黄さんには一切干渉しないこと、そして我々が暮らしていくための土地の確保だ。さらにもうひとつ、十四日目に真佐吉がリアル再起爆ス イッチを押す時に立ち会うことも求めたいな」

柊はにやりと笑った。

「さらにダメ押しで、もしもチャンスがあつたなら——、萌黄さん、俺は真佐吉をやるつもりだ」

柊はこれまでに見せたことのない、ふてぶてしい表情を浮かべた。もはやお坊さんのイメージは払拭する覚悟らしい。

「ただし、真佐吉が思いを遂げた後でだ。そのほうが真佐吉の警戒も解けるだろうし、だいいち我々以外のリアルに生き残られると困るからね」

萌黄の目に涙があふれた。どうしてこんな男を信用してしまったのか。やはり自分には人を見る目がない。

「俺の声が聞こえたという地震はその手始めだった。あ

れは真佐吉を呼び寄せるために起こしたものだ。一日も早くリアルを押さえたい真佐吉なら、強力なリアルがここにいることに気づいただろう。……真佐吉よりも前にリアルキラースをおびき寄せてしまったのは計算外だったかね」

柊はしゃべり疲れたのだろう。首を上下左右に動かすと、おもむろに立ち上がって背筋を伸ばした。

「さて、俺は見回りに行ってくる。次は真佐吉とリアルキラースのどちらが現れるかな。ハハハハ——」

ハツハツハツハツハ。

——だしぬけだった。

笑い声の二重唱。柊の笑い声に、別の笑いが重なった。「だ、誰だ！」

柊は瞬時に身構えた。萌黄も眼球だけをぐるぐると動かして発声源を求めた。

笑い声はクツクツという癩に障る含み笑いに変わった。しかし声の主の姿はない。

もちろん齋藤の声でも、ハジメの声でもない。ふたりは萌黄に足の裏を見せたまま、静かに寝息を立てている。笑いは消え入るように小さくなった。

「——そんなバカな」

柊のつぶやきを萌黄の耳は逃さなかった。するとそのつぶやきに呼応するように、正体不明の声は言った。

『拓巳、お前なにをしとる』

「――親父」

(な……なんで？ 柗さんのお父さん？)

萌黄の頭の中にクエスチョンマークが充満した。しかし声は委細構わず流れてくる。

『小さい頃から気が小さいくせに、虚勢ばかり張りおつて、このバカ息子が！』

そこには我が子の醜態に呆れる親の嘆きが込められていた。

「ウソだ！ 親父は三年前に死んだんだぞ！」

『まあ聞け、拓巳よ』

父親の声は、恐ろしく威厳にあふれている。柗は蛇に睨まれたカエルのように膝を震わせて立ちすくんでいた。

『世の中はな、お前を中心に回っているのではないし、お前の知っていることがすべてでもないぞ。このヴァーチャル世界というのはな、靈魂の存在する世界でもあるんだ』

萌黄は仰天した。靈魂!?

『この十日間、父はずっとお前を見守ってきた。嘘ではないぞ。出来の悪い息子を遺して死んだ親としては当然の行動だ。……しかしお前は勤める病院でもあまり評判はよくなかったようだな』

「ウルサイ、親父には関係ない！」

柘が真剣な口調で言い返す。どうやら声の主が父親であることと認められたようだ。だが父親は息子の叫びには耳を貸さずに話を続ける。

『宿直明けにお前の姿がなく、薬品が多数紛失してることに気づいた病院の人々が何と言ったか知ってるか？』

ああ、アイツならいつか何かやると思っていた、だと。

父は顔から火が出るほど恥ずかしかったぞ』

「顔もないくせに言うな」

スネた声を返す柘。完全に父親に飲まれている。

『そして家まで訪ねてきてくれた病院の同僚たちを、お前は惨殺したな。新しく得た力を試すためと称して』

「……………」

『続いてやってきた所轄の警察署の警官たちも同じ目に遭わせた。さすがに街にいられなくなったお前は逃亡した。山中の鄙ひなびた寺に身を隠し、住職には寝食の世話になったというのに、これも殺めてしまった。今お前の着ている袈裟が何よりの証拠だ』

（——連続殺人犯！）

『自暴自棄の一手前だったお前は、悪運が強いと言うか、タイミングよく、リアルに集合をかける広告をネットテレビで見た。生き延びる道はこれだと思ったお前は、追っ手を眩ますために頻繁に地震を起こして街を混乱に陥れた。あの騒ぎで何人が砂になったと思う？』

「俺の知ったことか……」

言葉の威勢はいいが、声に張りはなかった。柊は生前の父親に対して、まったく頭が上がらなかったようだ。

『拓巳よ、これ以上、父に心配をかけさせるな。お前がそんなでは父は成仏できない。お嬢さんに謝罪して、解毒剤を打ってあげなさい』

萌黄は柊の父親に感謝した。霊の存在については横に置いておいて。

柊は形の良い目を閉じて、父親の声に聞き入っているように見えた。

が、突然その目を開くと、

「そこか！」

と叫び、畳を蹴った。

15

萌黄は目を剥いた。柊が自分に向かって飛びかかってきたのだ。

「うろうろうろう」

抵抗したくても喉さえ満足に鳴らせない。ましてや大の男を振り払うことなど不可能。されるがままだ。

柊は萌黄の全身に手を這わせた。そして狂ったようにポケットというポケットを裏返していく。

「うはははは。見つけたぞお」

やがて柘は勝ち誇ったように、萌黄の携帯電話を高々と差し上げた。画面は通話状態になっている。

発見されてしまった！ 萌黄は心の中で肩を落とした。彼女は柘の父親を自称する声がしゃべり始めてすぐに、それがギドラの仕業であると思抜いた。靈魂の話で一瞬だまされそうになったが、いくらヴァーチャル世界とはいえ、突飛過ぎる発想だった。

柘にいつ感づかれるかとヒヤヒヤしていたが、とうとうバレてしまったのだ。

柘は片方の眉を上げ、つかんだ携帯に怒鳴りつけた。

「オイ誰だ、親父の名を騙かたってるのは!？」

(そうか、彼はギドラのことは知らへんのや)

柘とは京都工大から別行動だったため、ギドラの存在が仲間内に知られた時にはいっしょではなかった。

「もうバレてんだぞ、お前は誰なんだ!? どうやって親父や俺のことを調べた!？」

あくまでも萌黄の仲間が父親に成りすましたのだと思い込んでいる。

「———そうか、あくまで黙秘する気だな。それならこちらにも考えがある。萌黄がどうなってもいいんだな?」

柘のもう一方の手が萌黄の首筋に伸びた。すると、『バカ息子よ、これ以上の恥の上塗りには控えよ!』

携帯が一喝した。柎はヒツと首をすくませる。やはり父親の声（だろうと思われる）でドヤされると反射的に身体が反応してしまうのだ。いや、まだ偽物かどうか半信半疑なのかもしれない。

『お前は昔から動物を虐待する癖があつたな。表沙汰になるのを父がどれだけ苦勞して揉み消したか、知らぬはずはあるまい。今度、何か仕出かしても父は力にはなつてやれんぞ』

「てめえがそんなことが言えた義理か、エセ議員が！」  
柎は半狂乱になつて携帯を壁に叩き付けた。そして隅に立て掛けてあつた野球バットを握ると、携帯目がけて力まかせに振り下ろした。

ガツンッ。一撃で筐体に変形し液晶画面にヒビが入つた。柎は容赦せず、なおもバットを叩きつける。携帯は破片を撒き散らして粉々になつてしまった。

怒りの治まらない柎は窓に近づくと、振り上げたバットで今度は窓ガラスを割り始めた。破片は寝ている齋藤らの上にも飛び散つて畳の上に散乱する。

「クソ親父め、死んでまで俺を縛ろうとしやがって！」  
ガラスの次には雨戸が犠牲になつた。やがて雨戸も外れ落ち、夜の暗闇に向かつて柎は大声で吠えた。

「真佐吉いーっ、出て来ーい！ お前が欲しがってるリアルは俺が拉致した！ 欲しかったら取引に応じる！」

絶叫は琵琶湖の広い空に吸い込まれるように消えていく。柘は肩で息をしながら、ずるずると腰を落とした。ジャリツとガラス片のこすれる音がする。

「おい、萌黄さん……まだ起きてるか？」

柘は萌黄の目が自分を見たのを確かめると、自嘲的な笑いを浮かべた。

「恥ずかしいところを見せてしまったな。確かに俺は柘家のお荷物だった。生前の親父は県会議員、お袋は地元の私立高校の教頭、兄貴と姉貴はそれぞれ有名大学を出た市会議員と国家公務員ときた。できそこないの俺は小さな頃から柘家の問題児だったわけよ。……だがな、俺は親父の薄汚れたやり口を知ってる。どれだけたくさん弱者が泣きを見たかも知ってる。今は兄貴が地盤を引き継いで、親父と同じことをしてやがる。しかし俺は違うぞ。あんな腐った連中はこちらから縁を切ってやる」

柘は大きなガラス片を、手も使わずに空中に持ち上げた。そして目を動かすだけで破片は外に飛び出していた。ガチャーンと割れる音。

「俺がリアルに選ばれたのはきつと運命だ。腐った連中を肅正し、この世を糾ただせという、いわば神のお告げだ。

……袈裟を着ていて、神様もないもんだ」

柘は重そうな黒袈裟を脱ぎ捨てる。下はTシャツ一枚きりだ。色はやはり黒だが。

「萌黄さん、俺たちにはこのパワーがある。リアルはこの世界ではエリートであり、リーダーとなるべき存在だ。元の世界に戻って、ひ弱な一市井人として生きていくより、この世界を人類の理想郷に変えようと努力すべきだ。そのほうがよほど立派な思想だとは思うが、どうだ？」  
その時である。

夜の向こうで拡声器の音が響き渡った。

『リアルの人々よ、どちらにおられる！ 私は伊里江真佐吉である！ あなたがたを迎えにきた』

柘は夢から醒めたように顔を上げた。

「真佐吉だと？……あれは遊戯施設の管理所にあるマイクの音声……まさかまた偽物じゃないだろうな。ククク、偽物ならすぐに八つ裂きにしてやる」

のそりと立ち上がると、軽い身のこなしでひらりと窓枠を飛び越えた。

「そこを動くなよ。もつとも動きたくても無理か」

萌黄に捨て台詞を残し、柘はゆっくりと表のほうに歩み去った。

萌黄は手足を伸ばしたまま、天井を見つめていた。

（柘さんの目論見どおり、真佐吉さんが現れた。もしも真佐吉さんが柘さんの提案を受け入れたらしたら、齋藤さんとハジメさんは――）

逃げるなら今がチャンスだ。しかし。

萌黄はありつたけの気合いを込めて手足を動かしてみた。かろうじて筋肉がふるふると震えるだけで、五ミリと動かすこともできない。

そうしているうちに意識が遠のき始めた。ついに麻酔剤が脳内に侵入したのだ。

(アカン、このままやったら眠ってまう！)

萌黄は必死の思いで意識の井戸杵にすがりついた。落ちていくまいとイメージの中で足をばたつかせるが、じわじわと昇ってくる灰色の霧は、生き物のように萌黄の足にまとわりついた。

ダメだ。薬の力には勝てない。

萌黄は絶望し、両腕から力が抜けていった。

## 16

灰色の霧は萌黄の足に沿って這い上がると、ジーンズの間隙から彼女のふくらはぎにチョンと触れた。

(つめたっ！)

ひやっとした感覚が萌黄に意識を取り戻させた。灰色の霧はわずかばかり後退する。それでも別の方向に触手を伸ばすと、一気に飲み込んでやろうと狙いをすます。

(気色悪う。あっち行けっ！)

萌黄は無意識に大きなゴミ袋をイメージし、灰色の霧

に覆いかぶせた。霧は逃げようとするが、ゴミ袋の動きのほうが速い。

（サクサク吸い込んだれ〜）

萌黄の念が通じたように、ゴミ袋はどんどん巨大化し、霧を飲み込んでいく。その光景はさながら、体内に入った異物を攻撃する白血球を連想させた。

ゴミ袋が活発に動けば動くほど、萌黄の意識ははつきりとしていく。彼女は気づいた。

（これもリアルの能力なんや。体内に注入された麻酔剤を除去しようとしてるんやな）

じつさい指先に感覚が戻ってきたし、首がわずかだが左右に動かせるようになった。

萌黄は目をぎゅっと閉じ、イメージ力のアップに集中した。ゴミ袋は今や強力な掃除機のようにガンガン霧を吸い込んでいく。

ついに最後のひとつかみを吸い終えた時、萌黄は嘔吐感を催し、畳に両手をつけて、口中のモノを吐いた。

ドロリとした液体がこぼれ落ちる。

体外に排出された麻酔剤だ。

萌黄は背中を壁にもたせかけ、口許の汚れを手の甲で拭った。

ようやく動けるようになった。しかし身体はまだ完全に覚醒したわけではない。立とうとしても腰や膝に力が

入らない。

(急いで逃げんと、柗さんが戻ってくる)

両手でキッチンの端をつかみ、どうにか立ち上がることに成功した。が歩こうとするとバランスがうまく保てない。

「はいほうはん (齋藤さん) ……はひへはん (ハジメさん) ……」

呼ぶが応えはまったくない。

ところが、思いがけぬ応答が別の方角から飛んできた。

「萌黄さん、いるの？」

(その声は——)

「ひよははん (清香さん)！」

遮るものがなくなった窓の縁から、清香の顔がヒョイツと現れた。萌黄は(助かった!)という安堵感で畳の上にへたり込んだ。

清香は横たわる齋藤らに驚いたようだが、

「誰もいないの？」

と訊ね、萌黄が頷くと、ガラスで怪我しないよう、注意深く窓枠を越えて入ってきた。

「戻もろつてきれふれはんやあ。うれひー」

萌黄は感謝の気持ち声をにした。

「うん。でもギドラ君の助言のおかげよ」

「ヒホハが？」

「彼がわたしの携帯に来て、萌黄さんのピンチを教えてくださいましたの」

清香は携帯を萌黄の前に出した。ギドラが変わらぬ姿で飛翔している。

《やあ、大変だったね。ところでボクが化けた柊の父親はどうだった？ 彼はほとんど信用してたよね。彼の父親は県会議員だったんだ。しかもなかなかの外交家、悪くいえば出しゃばりだったので、あちこちに映像が残ってるんだよ。おまけに彼の秘蔵日記が選挙事務所のサーバーに残っていてね。誰も知らないんだけど。それを一通り読んだら息子の行状が全部判ってしまったよ。ハハハハハ》

萌黄は力なく微笑んだ。それを見てギドラは言い添えた。

《そうそう、携帯が壊されたのは残念だけど、モジ君はボクが助け出したから安心しなよ》

「あひがほう」

清香は部屋をぐるりと見渡した。

「急いで逃げなくちゃね。でもこのふたり……」

清香はハジメに近寄り、最初は軽く、そして二度目は少し力を込めて頬を張ってみた。しかし十代の青年はムニヤムニヤと言うだけで目覚める気配は皆無だ。

「どうしよう。男の人をふたりも抱えて運べるわけない

し」

「できまふ」

「無理よ。どうやって?」

「リアルのひはら（力）があれば」

ふたりを風船に乗せるようなイメージを描けばいいと  
萌黄はアドバイスした。

清香は試してみた。すると一分と経たないうちにふたりの身体が畳から浮上した。

「ほのまま、ほのまままで、窓はら外へ押し出すの」

清香は手の平を前に差し出す。するとまるで透明なフオークリフトを操作するように、ふたりの身体は宙を滑っていった。清香は膝を曲げ、両腕をそのままの形で前進する。萌黄はいつかテレビで観た『気功』を思い出した。

（彼女の場合、集中力のレベルが高いんや）

萌黄は清香の飲み込みの早さの秘訣を知った。

「どこにいる!? 私はここだ!」

観覧車を前に、柊は呼びかけた。

先ほどから湧いてきた雲が月の光を遮っている。

柊は全身の神経を周囲の空間に張り巡らせた。もちろん、そうイメージするのだ。彼はこうやってこれまで幾度となく困難を乗り越えてきた。彼の呼ぶ「神経レ-

ダー”で。

リアルキラーズの襲撃を受けた時のような混然とした気配はない。その代わり、彼のリーダーに感応したのはたったひとつの“点”だった。

（ひとりで来たな。しかもこの反応の強さはどうだ。まさしくリアルそのものだ。やはり真佐吉か？ ヤツに間違いあるまい。だとすれば即交渉開始だ。うまく取り入れれば、思い通りに操ることができるかもしれないぞ。どうせ研究一筋の世間知らずで、影武者などという子供騙しの手を使うような人間だ。俺が坊さんキャラを通せば、案外俺に尊敬の念を抱くかもしれない。さらには俺の持つパワーを見せつけるのも有効だろう。この観覧車を引きずり倒した時のようにな。フッフ）

柊は両手を合わせて拝む形をとった。そしてゆっくりとした口調で呼びかけた。

「そこにいるかた。出てきなさい」  
すると横倒しの観覧車の上に人影が現れた。

「——あなたは、柊さんではありませんか？」  
男の明瞭な声が問いかけた。

「いかにも柊拓巳です。あなたは真佐吉さんですね」  
しかし長身の男はそれに応えず、鉄骨の上を急ぐでもなく降りてくる。

その時、雲間から月が出てきた。辺りに月の光が降り

注ぐ。

長身、長髪、ジージャン。真佐吉のアイテムとことごとく合致する。どうやら本物のようだ。

「こちらへいらしてください、真佐吉さん」

柊は迎えるように、右手を差し出した。

長身の男はしかし、一歩手前でスツと鉄骨の中に飛び降りた。柊は男の姿を一瞬見失った。

「真佐吉さん？」

柊は手を挙げたまま、ゴンドラとゴンドラの間を見やる。

カツ、カツ、カツ。硬い靴音が近づいてくる。

やがて人影は月光の下に出てきた。そして柊の前で足を止めた。

柊は驚きのあまり声が出なかった。

真佐吉とは似ても似つかない人物がそこにいた。

しかも柊はその人物を知っていた。

相手は顔をほころばせた。

「私が、最後のリアルだ」

柊の悲鳴が、夜の静寂を切り裂いた。